21　次の文章は、夏目漱石が正岡子規をんで記したものである。子規は闘病のかたわら「写生」を唱えて短歌・俳句の革新運動を行い、三十代半ばで逝去した。これを読んで、後の設問に答えよ。　　〈東京大〉二〇二一年度出題

　余は子規の描いたをたった一枚持っている。亡友のだと思って長い間それを袋の中に入れてしまって置いた。年数の経つにつれて、ある時はまるで袋の所在を忘れて打ち過ぎることも多かった。近頃ふと思い出して、ああして置いては、転宅の際などにへ散逸するかも知れないから、今のうちに表具屋へやってにでも仕立てさせようという気が起こった。渋紙の袋を引き出してをはたいて中をべると、画は元のまま湿っぽく四つ折りに畳んであった。画のほかに、無いと思った子規の手紙もか出て来た。余はそのから子規が余に宛てて寄こした最後のものと、それから年月の分からない短いものとを選び出して、その中間に例の画を挟んで、三つを一まとめに表装させた。

　画は一輪ざしに挿したで、図柄としては極めてなものである。に「これはみかけた所と思いたまえ。アいのは病気のだと思いたまえ。だと思わばをついて描いて見たまえ」というが加えてある所をて見ると、自分でもそういとは考えていなかったのだろう。子規がこの画を描いた時は、余はもう東京にはいなかった。彼はこの画に、東菊けて置きけり火の国に住みける君が帰り来るかなという一首の歌を添えて、熊本まで送って来たのである。

　壁にかけて眺めて見るとイいかにもしい感じがする。色は花とと葉との瓶とを合わせてわずかにしか使ってない。花は開いたのが一輪にが二つだけである。葉の数を勘定して見たら、すべてでやっと九枚あった。それに周囲が白いのと、表装の絹地が寒いなので、どう眺めても冷たい心持ちが襲って来てならない。

　子規はこの簡単な草花を描くために、非常な努力を惜しまなかったように見える。わずか三茎の花に、少なくとも五六時間の手間をかけて、どこからどこまで丹念に塗り上げている。これほどの骨折りは、ただに病中の根気仕事としてよほどの決心を要するのみならず、いかにもに俳句や歌を作り上げる彼の性情からいっても、明らかな矛盾である。思うに画ということにな彼は当時絵画における写生の必要を不折などから聞いて、それを一草一花の上にも実行しようと企てながら、彼が俳句の上で既に悟入した同一方法を、この方面に向かって適用することを忘れたか、または適用する腕がなかったのであろう。

　東菊によって代表された子規の画は、くてかつ真面目である。才をして直ちに章をなす彼の文筆が、絵の具皿に浸ると同時に、たちまち堅くなって、穂先の運行がねっとりんでしまったのかと思うと、ウ余は微笑を禁じ得ないのである。虚子が来てこのを見た時、正岡の絵は旨いじゃありませんかといったことがある。余はその時、だってあれだけの単純な平凡な特色を出すのに、あのぐらい時間と労力を費やさなければならなかったかと思うと、何だか正岡の頭と手が、いらざる働きを余儀なくされた観がある所に、隠しきれないがれていると思うと答えた。馬鹿律儀なものにもいたもありようはない。そこに重厚ながあるとすれば、子規の画はまさに働きのない愚直ものの旨さである。けれども一一の瞬間作用で、優に始末をつけられべき特長を、に弁ずる手際がないために、やむを得ず省略のをてて、な塗抹主義を根気に実行したとすれば、拙の一字はどうしても免れ難い。

　子規は人間として、また文学者として、もっとも「拙」の欠乏した男であった。永年彼と交際をしたどの月にも、どの日にも、余はいまだかつて彼の拙を笑い得るの機会を捉え得たためしがない。また彼の拙にれ込んだ瞬間の場合さえもたなかった。彼のほとんど十年になろうとする、彼のわざわざ余のために描いた一輪の東菊のに、確かにこの一拙字を認めることのできたのは、その結果が余をして失笑せしむると感服せしむるとに論なく、余にとっては多大の興味がある。ただ画がいかにも淋しい。できうるならば、子規にこの拙な所をもう少し雄大に発揮させて、エ淋しさの償いとしたかった。

（夏目漱石「子規の画」による）

（注）　○東菊―キク科の多年草。切り花として好まれる。

○火の国―熊本。漱石は熊本の第五高等学校に赴任していた。

○不折―中村不折（一八六六～一九四三）。洋画家・書家。漱石と子規の共通の友人。

○才を呵して直ちに章をなす―才能のおもむくままに作品ができあがる。

○虚子―高浜虚子（一八七四～一九五九）。俳人。

○捷径―ちかみち。

問１　「いのは病気のだと思いたまえ」（傍線部ア）にあらわれた子規の心情について説明せよ。

問２　「いかにもしい感じがする」（傍線部イ）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

問３　「余は微笑を禁じ得ないのである」（傍線部ウ）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

◎問４　「淋しさの償いとしたかった」（傍線部エ）にあらわれた「余」の心情について説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ漱石との再会を心待ちにして活けた東菊を描いたが、そのＢ下手さは病で肘をついたせいだと強がりつつ、Ｃ病気のつらさも素直に吐露するＤ友への親愛。

Ａ・Ｂ・Ｄのないものは全体０。

Ａ＝３〔「友人との再会」という内容があれば可。〕

Ｂ＝２〔「拙さ」を「病気の所為」にしていることを説明。〕

Ｃ＝２〔「病気」に苦しむ姿を説明。〕

Ｄ＝３〔「再会を切望」なども可。心情の説明は必須。〕

問２　Ａわずかな配色の数や簡素な意匠、背景の色から、Ｂ病中の子規が丹念に描いた労力と時間が想像され、そのＣ苦悩や悲哀と重なり合って感じられるから。

Ａ・Ｃのないものは全体０。

Ａ＝３〔画が淋しい様子であることを説明。〕

Ｂ＝３〔子規が手をかけて画を仕上げたことを説明。〕

Ｃ＝４〔画と子規の心境が重なることを説明。〕

問３　Ａ文学では才能を発揮し、鮮やかな手さばきで作品を作る子規が、Ｂ画では苦悩しながら取り組んでいる愚直さにＣ好感を持ったから。

Ｂ・Ｃの内容がなければ全体０。

Ａ＝３〔子規の文学における才能を説明。〕

Ｂ＝３〔画での「愚直さ」「不器用さ」を説明。〕

Ｃ＝４〔「親しみ」「人間味」「微笑ましさ」なども可。〕

問４　Ａ文学では見られなかった愚直な子規の姿をＢさらに見たかったと述べることで、Ｃ尊敬する友ともっと交流を深めたかったというＤ哀惜を示している。

Ａ・Ｄの内容がなければ全体０。

Ａ＝２〔「拙な所」を説明する。〕

Ｂ＝２〔Ａをさらに見たかったことを説明。〕

Ｃ＝３〔もう少し長く交流したかったことを説明。〕

Ｄ＝３〔「偲ぶ」「死を惜しむ」なども可。〕